ゆとり教育で高校卒業時点での生徒の学力が低下し大学入学後の学業に支障が出ている、との指摘が良く為される。しかし、物理学に関して言うならば、大学初年次に学生が直面する困難は、ゆとり教育導入以前から、かなり大きかった。その事を私自身の体験実感に基づいて述べる。抽象的に言うと、問題は次の諸点ではないかと思う。

・大学初年次の学習内容は大学入試知識に比べて、もの自体が（＝ひねらなくても、いくら親切に解説しても）格段に難しい。
・大学では、授業も教科書も、高校までより解説が不親切（突き放した感じ）に成る。
・高校までは、何をすべきかは分かり切っており生徒の選択の余地はどれだけやるかだけだが、大学では、常道が常識化しておらず口承浮遊しているので学生の何をどれだけやるかの選択が投機的に成りがち。

そのため、真面目派の新入生は高校の木から大学の木へサーカスの様に飛び移れるか否かの瀬戸際に立たされる。これは危険だ。実際多くの学生が飛び移り損ねて大学には出席するだけの状態に陥っていただろう、と想像する。大学初年次教育を微調整して学生に飛躍を要求しないシームレス高大接続を実現すべきだ。私の大学初年次に微積分学演習という授業があった。演習という名前が付いていたが内容は講義だった。内容は偏微分の可換性の証明ではなかったかと思う。その授業が終わった後で、親しく成ったばかりの友人から「宇田君、分かった？」と聞かれ、分からなかったけれど、何故どのように分からなかったかを言いあぐねていると、その友人は「あれは、いくら宇田君でも分かるはずがない」と言って僕の答えをそれ以上は待たなかった、という事があった。この友人が「いくら宇田君でも」という言い方をしている事にも現れている事だが、私自身、高校生としては物理や数学がかなり良く出来る方だった。これは私にとって、高大接続の不連続性を象徴する出来事だった。